

基礎看護技術習得に向けた 看護学生の自己学習

— プレテストとチェックリストを導入して —

久田雅紀子¹, 種田ゆかり¹, 井村 香積¹

**The student nurse's self-study for basic nursing technology acquisition
— Pretest and Checklist —**

Akiko HISADA, Yukari TANEDA and Kazumi IMURA

Abstract

A purpose of this study is to clarify self-learning after having introduced a lecture method to learn a nursing technique and grounds in parallel.

I questionaired 79 second nurse students, and 3 classification 13 items of the inventory survey is pretest, check list, practical skill exercise about the self-learning for the nursing technique.

As a result, 99% of students prepared for lesson as preparations for pretest, and 60% of students prepared for lesson once soon at an average of 1-2 time. For a question whether “the preparations for lessons gave an understanding degree of a lecture and the practice”, it was the following answers. “Yes” : 71%, “No” : 0%, “neither yes nor no” : 29%

As for less than 30 minutes and the student who replied it, there were 30%, 1-2 hours and students who did it in the most 61% between the time when I used it for check list making of one practice. As for 40%, students who utilized the book except an appointed textbook by the check list.

About the exercise of the practical examination item, 97% students carried it out, but the exercise number of times of many students is 1-3 times, they didn't carry out the repeated practice.

In conclusion, it is necessary to examine of questions contents of the pretest between teachers and maintenance of the environmental aspect for repeated practice enforcement and the consciousness of the graduation level of the nursing technique.

Key Words: nursing education, basic nursing skill, learning will, self-learning

I. 背景

近年、医療機関や看護基礎教育機関で、新卒看護師や基礎教育課程を修了した学生の看護実践能力に対して大きな関心が注がれている。看護実践能力とは、基本的な「看護基本技術」とそれらを支える「看護ケア基盤能力」の2つに大別される。看護基本技術とは、環境調整技術や食事援助技術などの13項目から形成され、看護ケア基盤能力とは、看護過程の展開能力や援助的人間関係の形成などで構成されている（文部科

学省 2002）。

看護実践能力の向上に大きな関心が寄せられる背景として以下の2つがあげられる。まず第1に医療の高度化、患者の高齢化・重症化、在院日数の短縮に伴い、看護師に求められる実践能力が向上している点である。これと関連して、第2に新卒看護師が臨床現場で求められる実践能力は、看護基礎教育課程終了時点と大きく乖離し、その結果生じる精神的ストレスが新卒看護師の早期離職の大きな要因としてあげられている（日本人事労務研究所 2007）。

1 三重大学医学部看護学科基礎看護学講座

このような状況をうけて、2002年、文部科学省（以下、文科省）による「看護学教育の在り方に関する報告書（大学における看護実践能力の育成の充実に向けて）」、2003年、厚生労働省（以下、厚労省）による「看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会報告書」が相次いで出され、看護基礎教育における看護実践力の育成と看護技術教育の重要性が提言された。

更に、2007年、厚労省から「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」の中で新カリキュラム改正の趣旨が示され、学生の看護実践能力の強化を目的に、看護基礎教育終了時に習得すべき看護技術の種類と到達度が明確になった。この到達度に達成する1つの方法論として臨地実習での積極的な看護技術の実施が検討されているが、医療現場における安全確保の優先や患者の権利擁護の視点から、無資格である学生が経験できる看護技術が限定される傾向もある（稲垣2003）。

このような中で、2009年新カリキュラムが導入され、看護系大学103校を対象に行われた調査では、看護技術習得に関する見直しや検討を実施した大学が79.4%に達し、学内演習内容の見直しや4年間の技術習得プログラムの作成等を実施している（岡村2009）。

本学の基礎看護学領域においても診療補助技術を中心とした基礎看護技術について学び、基礎的な援助の方法を修得する「看護技術論Ⅱ」の講義・演習の中で、新たにプレテストやチェックリストを導入し、看護技術と根拠を並行して学ぶ学習過程を通して学生の学習意欲の向上と自己学習姿勢の育成を目指した。

そこで、本研究では、新たな教授方法としてプレテストとチェックリストを導入した「看護技術論Ⅱ」における看護学生の自己学習状況を分析したので報告する。

Ⅱ. 研究目的

本研究は、看護技術と根拠を並行して学ぶ教授方法導入後の自己学習状況を明らかにすることである。

Ⅲ. 看護技術論Ⅱの講義概要

1. 講義形式

看護技術論Ⅱの目的は、「対象者の個性性、ニーズに応じた看護を実践するために必要な基礎看護技術（主に診療補助技術）について学び、基礎的な援助の方法を修得すること」であり、開講時期は2年生前期である。講義時間は、2単位45時間の必修であり、1回の講義時間は演習も含めて135分である。全15回

の講義、演習の概要を表1に示す。また、講義は3人の教員が分担して実施した。

表1 看護技術論Ⅱの講義・演習概要

回	日時	授業形態	講義・演習内容	*1 教科書の該当範囲
1	4/12(月)	講義	コースガイダンス 【感染予防1】	考える I:15~22
2	4/19(月) プレテスト ①	講義 演習1	【感染予防2】 演習1:ガウンテクニック	プラ: 74~92 考えるII: 3~23
3	4/26(月)	演習2	【感染予防3】 演習2:滅菌手袋の着脱 演習3:無菌操作(創傷処置)	
4	5/10(月) プレテスト ②	講義	【排泄1】	プラ: 134~165 (146~152 は除く)
5	5/17(月)	演習3	【排泄2】 演習1:(尿器・便器・オムツ) 演習2:(浣腸・摘便)	考えるII: 115~141
6	5/24(月) プレテスト ③	講義 演習4	【感染予防と排泄】 演習1:一時的導尿・ 持続的導尿	プラ: 146~152 考えるII: 142~147
7	6/7(月)	実技試験	試験項目:(演習1~4)	
8	6/14(月) プレテスト ④	講義	【栄養と食事1】	プラ: 96~133 考えるII: 95~113
9	6/21(月)	演習5	【栄養と食事2】 演習1:食事介助 演習2:口腔ケア 演習3:経管栄養	
10	6/28(月) プレテスト ⑤	講義	【呼吸を整えるための看護1】	プラ: 302~334 考えるII: 319~351
11	7/5(月)	演習6	【呼吸を整えるための看護2】 演習1:ドレナージ 演習2:ネブライザー 演習3:吸引(鼻腔・口腔)	
12	7/12(月)	実技試験	試験項目:(演習5・6)	
13	7/23(月) プレテスト ⑥	講義	【検査を受ける人の看護】	考えるII: 211~238
14	7/26(月)	講義 演習7	【事例に則したコミュニケーション】	考えるI: 23~34
15	8/2(月)	筆記試験		

*1「プラ」は教科書「看護技術プラクティス」を示す
「考えるI・II」は教科書「考える基礎看護技術I・II 看護技術の実際」を示す

2. 演習形態

演習のグループ編成は、79名の学生を1グループ4名の20グループに分け、教員4名、大学院生による演習補助員を含めた非常勤教員2名の計6名で担当グループを決め指導を行った。なお、教材は、演習項目に応じ市販のDVD、または教員が実施しているデモンストレーションを撮影した画像等を活用した。また、演習内容の詳細に関しては、教員全員の共通理解を図るために、演習日の数日前に毎回打ち合わせを行った。

3. 実技試験

実技試験の実施回数は計2回であり、それぞれの実技試験項目は「一時的導尿」、「吸引」とした。「一時的導尿」に関しては、陰部モデルを装着した学生に患者役を依頼し、「吸引」に関しては吸引シミュレーターモデルを対象に実施した。なお、実技試験項目の提示は試験実施1週間前に行い、提示までの期間は演習で実施した全ての項目の実技練習を促した。

4. 今年度からの変更点

1) 技術論の位置付け

深井(2000)は、看護技術とは実施者の看護観と技術の習得レベルを反映するものであるととらえ、安酸(2001)は、看護技術とは看護観の表現技術だと強調している。これを受け、看護技術論IIの講義の中では、技術が単なる技能ではなく看護観を表現するための方法論として位置づけた。このため、講義初回に各自で指定の用紙を用い自分の看護観を確認した後、同じテーマでグループディスカッションを行い、技術が看護観を表現するものであることを強調した後、演習を実施した。

2) 看護技術と根拠を並行して学ぶ学習過程

以下に看護技術と根拠を並行して学ぶ学習過程を図式化した(図1)。

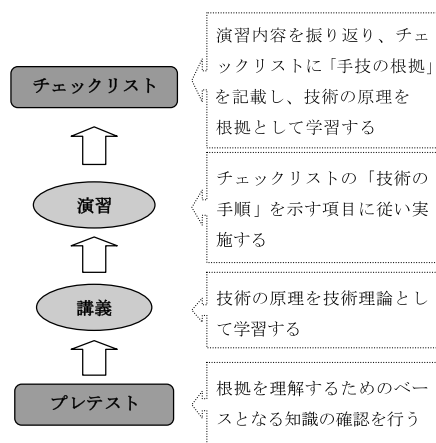


図1 看護技術と根拠を並行して学ぶ学習過程

(1) プレテスト

プレテスト実施の目的は、学生が技術の根拠を理解するためのベースとなる知識や、演習の概要をイメージした状態で講義を受講することである。プレテストの問題作成は、講義を担当している3人の教員が分担した。問題数は10問程度で、内容は指定教科書の講義内容に該当するページを一読してれば解答できるレベルに統一し、回答は講義開始直後の10分間とした。一例として、「一時的導尿」のプレテスト内容を資料1として提示する。また、実施したプレテストは、翌週の講義開始時に返却した。

資料1 「一時的導尿」のプレテスト内容

学籍番号	氏名	得点
「導尿」に関連した以下の質問1~10に○か×で答えなさい。		
【解剖学的知識】		
問. 1	() 人体の膀胱容量は約500mlである	
問. 2	() 女性の尿道の長さは8~10cm、男性は15~20cmである	
問. 3	() 空(から)の状態の膀胱の長さは5~7.5cmで、尿が充満しても長さ(容量)は変わらない	
【導尿に関する基本的知識】		
問. 4	() 導尿とは、排尿困難の患者に対する援助で、無菌操作で膀胱内の尿を排出することをいう	
問. 5	() 導尿には「一時的導尿」と「持続的導尿」があり、一時的導尿には医療従事者が行うものと患者自身で行う「自己導尿」がある	
【導尿の基本的手技】		
問. 6	() 男性に一時的導尿を実施する際は、仰臥位で膝を立て股関節を外転させた体勢で行う	
問. 7	() 女性に一時的導尿を実施する際は、仰臥位で下肢を伸ばしたまま肩幅に開いた体勢で行う	
問. 8	() 一時的導尿では、12~15Fr(フレンチ)の滅菌ネラトンカテーテルを使用する	
問. 9	() カテーテル挿入時、患者に腹圧をかけないように口呼吸を促す	
問. 10	() 男性では、尿道口からスムーズに滅菌ネラトンカテーテルを通過させるために、陰茎を腹壁に添わせて行う	

(2) チェックリスト

技術と技術理論を並行して学ぶことで、「なぜそうするか」という理由が科学的証拠によって明示されるため、技術は単なる模倣ではなく、必然的行為として学習される。この結果、習得レベルの向上や長期間の記憶の保持に有効であることが明らかである（深井2007）。これより、本講義で使用するチェックリストは「技術の手順」を示す項目が記載されたものを配布し、その後学生自身が「手技の根拠」を示す項目を記入することで手順と根拠を対応させながら、技術を必然的行為として学習することを目指した。

一例として、「一時的導尿」のチェックリストの内容を資料2として提示する。本講義での一時的導尿の目標は1) 患者の安全・安楽に配慮しながら実施できる 2) 患者の羞恥心・プライバシーに配慮しながら実施することができることの2点である。特に、患者の安全に関しては、膀胱や尿道の粘膜の損傷防止に加え、確実な消毒、無菌操作による感染防止を徹底するように指導した。また、演習終了後のチェックリストの提出は、「手技の根拠や留意点」を示す項目に“各手順に対する根拠”を含め“関連事項として自己学習した内容”を追加し翌週に提出してもらった。これに対し、記載内容に応じてA, B, Cの3段階で判定し、学生に返却した。

資料2 「一時的導尿」のチェックリスト

【演習目標】	
1) 患者の安全・安楽に配慮しながら実施できる 2) 患者の羞恥心・プライバシーに配慮しながら実施することができる	
技術の手順	手技の根拠や留意点
1. 患者の状態の事前アセスメント	【なぜ最終排尿時間を確認するのか？】 【なぜ下腹部の緊張状態をみるのか？】
1) 最終排尿時間の確認、下腹部の緊張状態、尿意の有無、水分・食事摂取量、バイタルサイン、泌尿器疾患の既往	
2. 説明と同意	・導尿の手技や体勢の保持の必要性などを説明する
2) 患者に導尿に関する説明を行い、同意を得る	
3. 必要物品を整える	・逆行性感染を予防するために「無菌物の取り扱いの原則」(4/26)
3) 次に実施する無菌操作に備え手洗い、または手指消毒を行う	
4) 滅菌物の破損の有無を確認する	・無菌操作を徹底する
4) 滅菌物の化学的インジケーターで滅菌できているか確認する	
5) 滅菌物の有効期限を確認する	
6) 滅菌物の有効期限を確認する	

7) 清潔なワゴンの上で鑷子立て、長鑷子、万能瓶、綿球を開封し、万能瓶に消毒液を入れる	<p>・ネラトンカテーテルは滅菌エリアから、はみ出さないように留意する【なぜ滅菌トレーを置く順番や位置をこのようにするのか？】 【陰部が汚れている場合はどのように対処するのか？】</p> <p>【なぜ尿道口から膣口の方向に消毒するのか？】 【なぜ、小陰唇を開き続ける必要があるのか？】</p> <p>【誤って膣に挿入した場合どのように対処するのか？】</p> <p>【なぜカテーテルの末端が尿などに触れてはいけないのか？】</p> <p>【なぜ角度を変える必要があるのか？】 【カテーテルがスムーズに入らない場合どのよ</p>
4. 患者の準備を整える	
8) 患者の下着を外しバスタオルや綿毛布を用い、下半身の露出を避けた状態で体勢を整え臀部に処置用シーツを敷く 【男性】両膝を伸ばした状態 【女性】両膝を屈曲した状態	
5. 導尿セットを開き、患者の足元に置く	
9) 導尿セットを開封し、万能瓶から綿球3個を取り出しトレーに置き、潤滑油をシャーレにいれる	
10) ネラトンカテーテルを開封し長鑷子を使用しトレーに入れる	
11) 患者の左足大腿付近から尿器、膿盆、最後に滅菌トレーを右足元に置く	
12) 導尿の処置を行うことを告げ、バスタオルや綿毛布を外し処置用手袋を装着する	
6. 陰部を消毒する	
13) 【女性】小陰唇を片方の手で開き、尿道口の位置を確かめる	
14) 【男性】陰茎の根元を持ち、尿道口を露出させる	
15) 【女性】消毒は1回ごとに綿球を変えながら左右の小陰唇の左右内側(①、②)と外尿道口(③)を尿道口から膣口に向かって計3回実施する。また、一度消毒をしたら、尿の流失が終わるまで左手を離さないで小陰唇を開き続ける	
16) 【男性】消毒は1回ごとに綿球を変えながら尿道口から外側に円を描くように尿道口周囲を3回消毒する	
7. カテーテルの挿入と尿の流出確認	
17) 患者に腹圧をかけないように口呼吸することを促し緊張を和らげる	
18) 【女性】カテーテルの先端5cmのところを持ち、それを目安にしながら4~6cm挿入する。カテーテルの末端は可能な限り尿器の壁や溜まってくる尿に触れないようにする	
19) 【男性】陰茎を腹壁から90度に拳上し15cm挿入する。その後角度を60度くらいまで倒し5cm挿入を続ける	
20) 尿の観察を行う	
21) 尿が出なくなったら下腹部の	

恥骨結合の方向に静かに圧迫し、 残尿を出す	うなことが予測されるか？また、 どのように対処 するのか？ 【尿の観察項 目は？】 ・スタンダー ドプリコーショ ンに則り、医 療廃棄物とそ れ以外の分別 を確実に 行う
8. カテーテルの抜去	
22) 残尿を収尿しやすくするため カテーテルを静かに回転させな がら抜去する	
23) 尿道口付近をティッシュで押 さえ拭きし、手袋を外してから 陰部をバスタオルで覆い、下着 をつける	
24) 廃棄物を適切に処理する	

(3) 評価方法

学期末に実施する筆記試験や実技試験に加えて、上記に記述したプレテストの獲得点数やチェックリストの記述内容を単位評価の対象にすることを講義初回に説明し、学生の同意を得た。具体的な評価配分は、プレテスト（計6回）15%、チェックリスト（計7回）15%、実技試験（2回）40%、筆記試験30%である。

IV. 研究方法

1. 用語の操作的定義

自己学習：学生が正規の講義時間以外で自分で学習すること（関谷 2009）。

基礎看護技術教育：基礎看護学領域で学ぶ看護技術を指し、他の専門領域での技術を獲得する基礎となる技術。

演習：教員の指導のもとに看護技術の指導を探索的に行う授業であり、看護実践を想定して学生が患者役、看護師役を模擬体験する形式で看護技術を実施する（野本 1998）。

2. 対象

平成 21 年度に本大学看護学科に入学した 2 年生のうち、看護技術論Ⅱを履修した 79 名。

3. 調査期間

平成 22 年 8 月

4. データ収集方法

全講義終了時に無記名の自記式質問紙を配布し、回収した。質問内容は、看護技術論Ⅱで導入した「プレテスト」、「チェックリスト」と講義時間外に学生が自主的に行った「実技練習」の 3 分類 13 項目から、看護技術に対する自己学習に関して尋ねたものである（表 2）。

5. 倫理的配慮

研究の目的、方法、研究協力の意思の確認方法を書面で説明した。また、質問紙は個人名を特定しないようにデータ処理し、目的以外には使用せず、協力の有無は成績と関連がないことを文書と口頭で説明した。

V. 結果

平成 21 年度に本大学看護学科に入学した 2 年生のうち、看護技術論Ⅱを履修した 79 名に質問紙を配布した。回収数は 74 名（94%）、有効回答数は 69 名（87%）であった。

1. プレテスト実施に関連した自己学習（表 3）

プレテスト実施の準備として表 3-1) に講義前の予習の有無、表 3-2) に、予習に要した平均時間を示した。68 名（99%）の学生が講義開始前に予習を行い、それに要した時間を 1 回平均 1～2 時間と回答した学生が 41 名（60%）と最も多かった。

また、『事前に予習をしたことで、講義や演習の理解度が上がったか』に関しては、「はい」と回答した学生は 48 名（71%）、「いいえ」と回答したものは 0 名（0%）、「どちらともいえない」と回答した学生が 20 名（29%）であった（表 3-3）。また、自由記述形式で尋ねた講義全般に対する意見は全てプレテストに関するものであった。以下にその詳細を記述する。

「プレテストがあるとわかっていたので事前に勉強してから授業をうけるという形になり授業はわかりやすかった。しかし、プレテストの解答について、講義内でとこところ説明はしていたが、教科書で調べてもわからないものもあったので回答が欲しい」（1 名）、「プレテストの準備に時間をかけたが、自分の解答が正解か不正解かがわからないので解答が欲しい」（1 名）、「プレテストで授業に心構えができ内容を前もって把握できたので、より細かいところも興味を持って（自分での解決等）取り組むことができた」（1 名）、「プレテストの出題傾向をある程度統一させてほしい」（1 名）。

表2 質問項目

問1	看護技術論Ⅱのプレテストの準備として予習をしてから講義に臨みましたか 1:はい 2:いいえ
問2	問1で「はい」と答えた方のみお答え下さい。1回のプレテストの平均予習時間は約()である 1:30分以内 2:1~2時間 3:2~3時間 4:3~4時間 5:4時間以上
問3	問1で「はい」と答えた方のみお答え下さい。 事前に予習をしたことで講義や演習の理解度が上がったと思いますか 1:はい 2:いいえ 3:どちらともいえない
問4	問1で「いいえ」と答えた方のみお答え下さい プレテスト(小テスト)の準備として予習をしなかった理由を自由記述方式でお答え下さい
問5	1つの演習のチェックリストの作成に、どの程度の時間を使用しましたか 1:30分以内 2:1~2時 3:2~3時間 4:3~4時間 5:4時間以上
問6	各演習のチェックリストの作成のために、指定された教科書以外の文献を活用しましたか 1:はい 2:いいえ
問7	技術と根拠を並行して学んだことで各演習で技術の根拠を意識するようになりましたか 1:はい 2:いいえ
問8	看護技術論Ⅱの実技試験の項目(ガーゼ交換・吸引)を自主的に練習しましたか 1:はい 2:いいえ
問9	問8で「はい」と答えた方のみお答え下さい。練習を実施した回数は4月から7月までで、計()回である 1:1~3 2:4~6 3:7~10 4:11~15 5:15以上
問10	問8で「いいえ」と答えた方のみお答え下さい。自主的に練習を行わなかった理由を自由記述形式でご記入下さい
問11	看護技術論Ⅱの実技試験の項目ではない演習に関して、練習を行いましたか 1:はい 2:いいえ
問12	問11で「はい」と答えた方のみお答え下さい。自主的に練習を実施した回数は4月から7月までで、計()回である 1:1~3 2:4~6 3:7~10 4:11~15 5:15以上
問13	問11で「いいえ」と答えた方のみお答え下さい。自主的に練習を行わなかった理由を自由記述形式でお答え下さい

*その他、看護技術論Ⅱの講義内容に関して、ご意見があればマークシート裏面にご記入下さい

表3 プレテスト実施に関連した自己学習

表3-1) 予習の有無

	人数(人)	割合(%)
はい	68	99
いいえ	1	1
合計	69	100

表3-2) 予習平均時間

	人数(人)	割合(%)
30分以内	10	15
1~2時間	41	60
2~3時間	12	18
3~4時間	4	6
4時間以上	1	1
合計	68	100

表3-3) 講義や演習の理解度の向上

	人数(人)	割合(%)
はい	48	71
いいえ	0	0
どちらともいえない	20	29
合計	68	100

2. チェックリストの作成に関連した自己学習 (表 4)

1回の演習のチェックリスト作成に要した平均時間を30分以内と回答した学生が21名(30%)、1~2時間と回答した学生が42名(61%)で最も多かった(表4-1)。また、チェックリストの「手技の根拠や留意点」を示す項目を記載する際に29名(42%)が「指定された教科書以外の文献を活用した」と回答している(表4-2)。

これに関連して、「各演習において技術の根拠を意識するようになった」と回答した学生が68名(99%)であった(表4-3)。

表4 チェックリストの作成に関連した自己学習

表4-1) チェックリスト平均作成時間

	人数(人)	割合(%)
30分以内	21	30
1~2時間	42	61
2~3時間	6	9
3~4時間	0	0
4時間以上	0	0
合計	69	100

表4-2) 教科書以外の文献の活用

	人数(人)	割合(%)
はい	29	42
いいえ	40	58
合計	69	100

表4-3) 根拠の意識化

	人数(人)	割合(%)
はい	68	99
いいえ	1	1
合計	69	100

3. 実技練習の実施状況 (表 5)

表5-1)~4)に実技試験項目と実技試験項目以外の演習に関して、それぞれの自己練習の有無と練習の回数を示した。実技試験項目に関しては、68名(99%)の学生が実施したと答え、その実施回数は1~3回が37名(54%)、4~6回が25名(37%)であり、全体の88%を占めている。実技試験項目以外に関しては、40名(58%)の学生が練習を行ってはいないものの、29名(42%)の学生は実施していないと答えている。また、実施の回数は1~3回が27名(68%)、4~6回が8名(20%)であった。

これに関連し、自由記述形式で記載してもらった『実技試験以外の演習項目の練習を実施しなかった理

由』に対する回答は以下の通りである。「他の課題やアルバイト、部活の時間を優先した」(6名)、「実技試験に合格すればいいという考えがあった」(4名)、「現時点で、卒業後すぐに現場で通用する技術レベルに達成しようと思っていない」(3名)、「実習室にある物品を全て使用していいのか判断ができなかった」(3名)、「演習が終わった時点では、ある程度は理解できている気がしていた」(2名)。

表5 実技練習の実施状況

表5-1) 実技試験項目の実技練習の有無

	人数(人)	割合(%)
はい	68	99
いいえ	0	0
無回答	1	1
合計	69	100

表5-2) 実技試験項目の実技練習の回数

	人数(人)	割合(%)
1~3回	37	54
4~6回	25	37
7~10回	6	9
11~15回	0	0
15回以上	0	0
合計	68	100

表5-3) 実技試験項目以外の実技練習の有無

	人数(人)	割合(%)
はい	40	58
いいえ	29	42
合計	69	100

表5-4) 実技試験項目以外の実技練習の回数

	人数(人)	割合(%)
1~3回	27	68
4~6回	8	20
7~10回	3	8
11~15回	2	5
15回以上	0	0
合計	40	100

VI. 考 察

1. 看護技術と根拠を関連させる過程

1) 看護技術の根拠を理解するための学習

プレテストの準備として、99%の学生が講義開始前に予習を行っていた。これは、講義初回にプレテ

ストの獲得点数が単位認定に加味されることを説明したことや教科書の指定ページを示し、出題範囲を明確にしたことも一つの要因として考えられる。これとともに、71%の学生が事前に予習を行ったことで講義や演習の理解度が向上したと感じており、「(講義の)内容を前もって把握できたので、自分での解決等より細かいところまで興味を持って取り組むことができた」との記述もみられたことから、多くの学生が技術の根拠を理解するためのベースとなる知識の確認や、演習の大まかな手順をイメージした上で講義を受講することが出来たことが予想される。しかし、プレテストの内容に関して、「教科書で調べてもわからないものもあった」、「プレテストの出題傾向をある程度統一させてほしい」との意見も複数みられた。これは、初回講義時に、プレテストの出題内容に関して、指定教科書の講義内容に該当するページを一読していれば解答できる程度であると説明をしていたものの、本科目のプレテスト作成者を3人の教員で分担したことから、出題傾向や難易度の格差がみられたことが予測される。今後は、教員間でプレテストの実施目的の共通理解を図り、これに見合った出題内容を検討していく必要がある。

また、29%の学生が予習による講義・演習の理解度の向上に関して「どちらともいえない」と回答しており、予習による講義や演習の理解向上を実感できていない。この要因として、指定教科書と講義内容の飛躍や乖離、学生の個々人の予習内容や方法が適当ではないことが考えられる。

本研究では、学生個々人の予習方法の妥当性や予習内容とプレテストの獲得点数との関連を明らかにしていないため、この点も含めて、さらに調査を進めていく必要がある。

2) 実施した看護技術のリフレクション

深井(2007)は技術と技術理論を並行して学ぶ科学的方法を用いる有効性を以下のように述べている。まず第1に、習得までの時間の短縮と飛躍的な習得レベルの向上が期待できること、第2に、「なぜそうするか」という理由が科学的証拠によって明示されるため、技術は単なる模倣ではなく必然的行為として学習される。このため、たとえ手順を忘れてしまった場合も、正確に保持された理論の記憶をたどることによって比較的容易に思い出すことができる。

本講義においても、演習時間内では一通りの手順の実施のみに留まることが予測されたため、演習時間後に自分の実施した技術を振り返り、チェックリストを作成する過程で技術と根拠をリンクさせるこ

とを目指した。この結果、全講終了時に、指定された教科書以外の文献を活用した学生は42%で、99%の学生が各演習において技術の根拠を意識するようになったと回答してはいる。しかし、講義開始時、あるいは他科目との比較検討が行えていないため、本教授法による効果と限定することは難しい。

2. 反復練習の必要性

一般的に、技術には理論やそれに基づく知識が背景にあるとされている。しかし、その技術を習得するためには、理論やそれにもとづく知識のみでは不十分で何度も反復練習することによって、その技術を実践する際の感覚が研ぎ澄まされ、その技術の技能を習得するという過程をたどることが必要である(関口1998)。このことは、看護技術の習得に関しても共通する点であり、看護技術の習得においても、自己学習としての反復練習が不可欠となる。

しかし、本研究において、実技試験項目の実技練習に関して99%の学生が実施したと回答しているものの多くの学生の練習回数は1~3回であり、確実に反復練習が実施出来ているとは言い難い。さらに、実技試験項目以外に関しては、約半数の学生が演習時間内のみの実施にとどまり、自主的に練習をしていないと答えている。この背景として、「演習が終わった時点では、ある程度は理解できている気がしていた」と複数の学生が回答していることから、反復練習の必要性の理解不足や卒業時到達レベルの認識不足、他の学生に患者役を依頼しにくい現状等が考えられる。社会的に看護実践能力の向上に大きな関心が寄せられる背景も踏まえた上で、現時点での到達レベルを定期的に意識化してもらい、反復練習の実施につなげることが必要である。

技術理論とともに学習した看護技術は、学習機会があるごとに繰り返し訓練することによって次第に習得されるものである。さらに時間をかければ早く上達するというものでもなく、訓練は一定の間隔を置きながら繰り返す方が記憶の強化には効果的である(深井2007)。基礎看護学領域では、新カリキュラム導入に伴い内容が一部変更された「看護技術論Ⅲ」の中で、既習の看護技術論Ⅰ・Ⅱの演習内容を複合的に実施する予定である。これは、深井が述べている“一定の間隔を置きながら反復練習を行う積み上げ型の演習”に相当するため、学生の記憶の保持や強化に有効であると思われる。

一方、自己練習を行わなかった一要因として、学生が物品の配置場所が不明瞭など環境面の整備不足を指摘しているため、自己学習教材の充実とともに、使用

物品の明示が必要であると考えられる。

文 献

- 1) 藤岡完治, 安酸史子, 村嶋さい子, 中津川順子 (2001) : 学生とともに創る 臨床実習指導ワークブック 第2版, P 10, 医学書院
- 2) 深井喜代子 (2007) : 基礎看護学② 基礎看護技術I, p 8, メジカルフレンド社
- 3) 稲垣美紀, 土居洋子, 西上あゆみ (2003) : 学部学生の卒業時における看護技術の習得状況 (第2報), 大阪府立看護大学紀要, 9 (1), 7-14
- 4) 看護学教育の在り方に関する検討会 (2002) : 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて 文部科学省高等教育局医学教育課
- 5) 看護学教育の在り方に関する検討会 (2004) : 看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標 文部科学省高等教育局医学教育課
- 6) 看護基礎教育における検討会 (2003) : 看護基礎教育における検討会報告書, 厚生労働省医政局看護課
- 7) 野本小百合 (1998) : 基礎看護技術と看護の専門性—演習における授業展開—, Quality Nursing, 4 (3), 25-30
- 8) 日本人事労務研究所 (2007) : 参考資料 新卒看護職員の早期離職の実態, 月刊人事労務, 19 (5), 34-37
- 9) 岡村典子, 藤井徹也, 堀良子 (2009) : 看護系大学における基礎看護技術習得に向けた教育に関する検討, 日本看護学教育学会誌 19 (1), 13-27
- 10) 関谷由香里, 青木光子, 岡田ルリ子他 (2008) : 基礎看護技術の自己学習プログラムに関する研究 18 (1), 日本看護学教育学会誌, 55-63
- 11) 関口富左 (1998) : 人間生活論考 (初版), 紀伊国屋書店, 167-168
- 12) 吉田文子 (2009) : 専門分野I 基礎看護技術の教授方法の工夫, 看護教育, 50 (3), 216-221

要 旨

本研究は、看護技術と根拠を並行して学ぶ教授方法導入後の自己学習状況を明らかにすることである。

研究方法は、看護学科2年生79名を対象に新たに導入した「プレテスト」、「チェックリスト」と講義時間外に学生が自主的に行った「実技練習」の3分類13項目から、看護技術に対する自己学習に関して尋ねた質問紙調査を実施した。

その結果、プレテストの準備として99%の学生が講義開始前に予習を行い、それに要した時間を1回平均1~2時間と回答した学生が60%で最も多かった。また、『事前に予習をしたことで、講義や演習の理解度が上がったか』に関しては、「はい」と回答した学生は71%、「いいえ」と回答したものは0%、「どちらともいえない」と回答した学生が29%であり、

また、1回の演習のチェックリスト作成に要した平均時間を30分以内と回答した学生が30%、1~2時間と回答した学生が61%で最も多かった。また、チェックリストを作成する際に「指定された教科書以外の文献を活用した」と回答した学生は42%であった。

実技試験項目の実技練習に関して99%の学生が実施したと回答しているものの、多くの学生の練習回数は1~3回であり、反復練習を実施出来ていないとは言い難い。さらに、実技試験項目以外に関しては、約半数の学生は演習時間内の実施に限定され、自主的に練習をしていないと答えている。

これらを踏まえた上で、教員間でのプレテストの出題内容の検討や、看護技術の卒業時到達レベルの意識化とそれに伴う反復練習実施に向けた環境面の整備の必要性が示唆された。

キーワード: 看護教育, 基礎看護技術, 学習意欲, 自己学習

